

忠臣蔵のフェイクニュース



義士大観より

代表代行 荻原 栄

イギリスのEU離脱や、アメリカ大統領選などを契機に、最近フェイクニュースという言葉が話題になっている。

フェイクニュースとは、うそのニュースのことで、政治家などが自分に都合の良いそのニュースを流し、それによって、世間を都合の良いように操作するために使っている。また、お金のためや、自分の支援者を応援するために、でっち上げのニュースをSNS（インターネット等）などで流すこともしている。

マスコミは政治家がうそを言っていると知っていても、そのニュースが面白いので視聴率をとるし、選挙中の発言は削るわけにもいかないため、そのまま流し続ける。選挙が終わって、あれはうそだったと問題にしても、国民の半数以上が投票し、決してしまっているのが遅いのである。

忠臣蔵（元禄事件）に関しても同じ現象が広がっている。NHKで、しかも権威ある大学の教授が監修した番組は、フェイクニュースであってもほとんどの視聴者は信じてしまう。たとえ視聴率が数パーセントであった

NPO 法人

忠臣蔵倶楽部会報

発行人

〒135-0047

東京都江東区富岡1-17-1-403

忠臣蔵倶楽部

TEL&FAX 03-3630-1927

編集者 中島康夫

ホームページ

忠臣蔵会館

出版・校正・協力

テレビ制作協力

講演・史跡案内

<http://www.chuushingura.net/>

「元禄赤穂事件の記録」

定価 2200円

(消費税含)

送料 350円

048-973-3777

郵便局の払込票をご利用下さい

中央義士会

00130-0-54568

としても、見ている人数は数百万人にも及ぶのである。

放映終了後に、放送局に間違っている旨の文書を送っても、うんともすんとも応答はない。数百万人の頭にフェイクニュースがすり込まれるのである。それどころか、ある旅行社の案内説明人が、NHKの間違った「松之廊下現場検証」を、そのままお客様に説明していると聞くにつれ、驚き呆れるばかりである。

フェイクニュースが広がる背景には、SNSによって拡散し、自分に都合の良いニュースだけ受け取ろうとする人の増加がある。さらにそれが信頼のおける人、または地方自治体や放送局などの公共団体からのものであればなおさら信じてしまうことになる。

どこかの地方自治体が、「吉良上野介は名君」だ、「討入りはテロ」だ、と発信すると、それがじわりと広がり、今では吉良上野介を再評価する動きさえある。

問題は、都合の悪いところは隠し、都合の良いところだけ取り上げることである。黄金堤や塩田は吉良上野介の事蹟ではないと、地元の史実家が証明し、赤馬伝説は明治以降の産物であると分かっているにもかかわらず、それを名君のしたことにしてしまう。吉良上野介は浅野内匠頭や多くの大名に意地悪をして、横柄で性格が悪い、などと元禄期に書かれた一級史料があっても、それは知ってか知らずか無視する。これも先の大統領選と同じなのである。

一旦拡散してしまったフェイクニュースは取り下げようが無い。さらにまずいことに、本当のことだと信じてしまったニュースは真実として、人々の頭の中に入り込んだままとなるのである。ある新聞記者が、トランプ氏に投票した有権者に、あのニュースはフェイクで真実はこうだ、と説明しても、その話こそフェイクだろうと一蹴されてしまったとの笑えない話がある。

多様な方法で発信される情報を、フェイクニュースだと判断するにはどうしたらよいか。

マスコミは苦慮しているようだが、忠臣蔵（元禄事件）では、まずは情報の発信源を確認することである。例えば、討入りをテロと言っていたら、そこに、「テロという理由は何か」と問い合わせるのである。そうすると「あれはテロでしょう、皆さんそういっています」というような主観的な回答が返ってきたら、それはフェイクニュースだと判断すればよいのである。真実であれば、しっかりと史料を基に答えるはずである。ただ、地方自治体や放送局などは忠臣蔵の研究をしているわけではないので、問い合わせても、まともな答えは返ってくるとは思われないが、抗議の意味も含めて、どんどん問い合わせたい。各団体のホームページには問い合わせのページもあるので、気楽にアクセスして欲しい。多くの声は、少しずつでも変化を起こす。

次に一貫して史実を108年間追い求めてきた中央義士会、又は当忠臣蔵倶楽部に問い合わせることである。史料を基に真実を追い求めてきた研究機関なので、フェイクニュースは発信しない。最新研究も踏まえて回答するのでこちらも気楽に問い合わせたい。また、最新研究結果を反映した図書も毎年刊行しているので、そちらも読んでいただければ幸いである。

そもそも「梶川氏日記」(仮称) なるものは存在するのか

代表 中島 康夫

元禄赤穂事件(以下元禄事件という)を考察調査する上で、その原形となるのが、その事件関係者が書いたとされる「根本史料」である。

その中で特に、この事件の発端となった「松之廊下刃傷」の現場に出くわした旗本七百石、御広敷詰の留守居番梶川與惣兵衛が記したとされる「梶川氏日記」(仮称)の内容が元禄事件の始中終全ての大きな鍵を握る。

現在、この史料の真書(良書)は確認できず、一・二・三認められている史料も全て「写し」である。

一般に、写本でも真書を写したものと考えられる場合、内容はほぼ真書と同様と判断されるのが史学会の常識である。勿論、専門家によって充分精査されなければならぬ過程を踏んだうえで認められるのである。

「梶川氏日記」も同様である。

現在確認できる「梶川氏日記」の写本は

(一) マスコミによく使われる

東京大学史料編纂所が保管している「梶川氏日記」であるが、この資料は明治四年に東京大学の職員により書き写された資料であるので、「古文書」の部類に属するかはなほ疑問である。

(二) 現在、東京大学総合図書館が保管している

「梶川與惣兵衛日記」(写本)である。

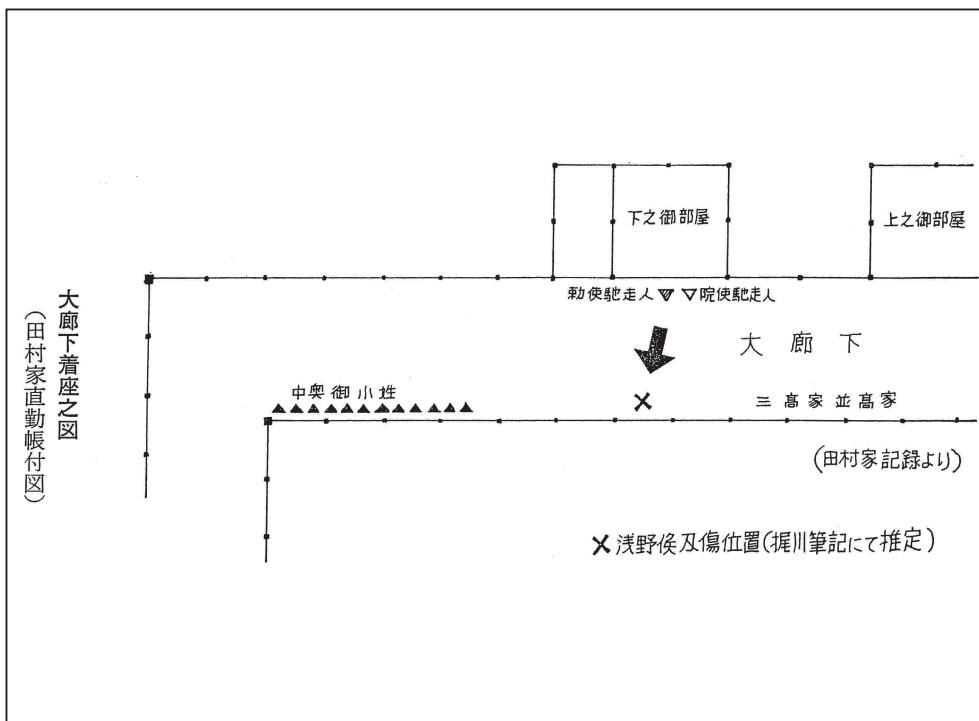
この史料は、梶川與惣兵衛の家臣が最初に写しとった経緯が認められるので、比較的信頼がおけると判断されるのである。

小生もある時期よりこの(二)の史料を研究の対象としてきた。

(三) 国会図書館が保管している「梶川氏筆記」(写本)である。この史料は江戸中期の弘化四年頃に幕府の奥右筆向山誠齋が写した「丁未雜記」の中に確認できる史料である。(一)の史料編纂所の資料は、この(三)の史料を写しとったものと判断される。

因みに、これらの史料が活字化されて、(一)(三)は「赤穂義人纂書

史料図①



中央義士会事務局長齊藤茂氏が示した図。昭和 50 年 12 月「赤穂義士実纂」に示された田村家直勤帳を元に掲載された図。世に初めて示された浅野内匠頭の位置図である。

この図は、勅使を「下之間」(大広間)へ迎える前の図であり、3万石から7万石の大家族では、ほとんどが保管している当時としては一般的な図である。

(一) (鍋田晶山編) に収容されている。
 (二) は、「赤穂義士流芳」(伴信友編) に納められている史料であり、「赤穂義士史料下」で見られる。

さて、その内容であるが、事件の一部始終を確実に伝えていし、筆記者梶川の誠実さや心情が偽りなく描かれている。

結論をいえば、

「浅野内匠頭の気持ちも分かっていたが、自分は吉良上野介とは親友(朋友)なので、浅野を止めてしまった」

と後悔の念を述べているのである。

以上から察して「梶川氏日記」の文中に示されている吉良の浅野に対する悪口「一言二言」の内容までは書けなかったわけである。

右の「一言二言」が「松之廊下事件」の原因であり発端であるのだが、武士として余りに「辛辣」な言葉であったがため、しのびがたく筆には出来なかつたと推量される。

この「一言二言」こそ、室鳩巢の「赤穂義人録」に示されていると小生は強く主張するのである。

これらの主張は、既に中央義士会の会報等で発表しているので、そちらを参照していただければ幸いである。

○NPO 法人忠臣蔵を守る会 二二号会報

喫緊版「松之廊下事件の原因」

○中央義士会 六十七号会報

「梶川與惣兵衛日記と赤穂義人録の整合性」

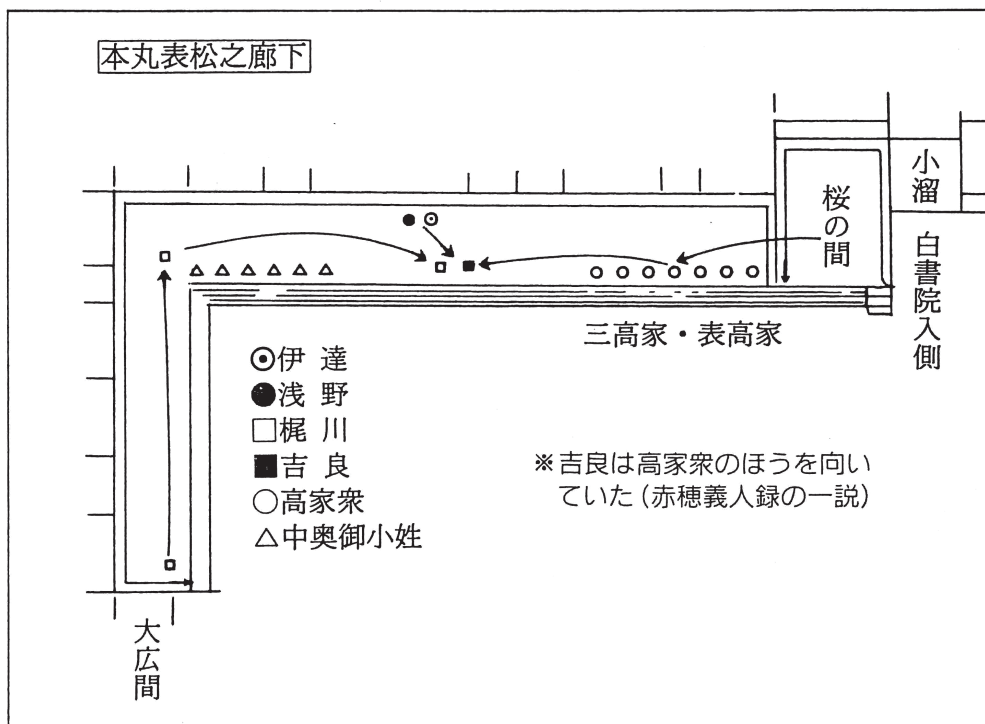
もう一ヶ所疑問に思うのは「梶川氏日記」が、元禄十四年三月十一日から同十九日までの十四日の刃傷事件に係る部分しか確認できていないことである。

日記(日誌)というからには、少なくとも何年か書き続けてあった書物なのかは今となっては知るよしもないが、小生が本論の「表題」にした「梶川氏日記」の存在を疑問に思ったのは、正に、その事である。

元禄十四年三月十四日を中心に、わずか九日間の事、しかも城中の事のみである。私生活などについては一切筆記されていない。

事件の詳細を、組織の上へ報告するための「供述調書」的要素も含んでいないのかと小生は永い間思ってきた。

史料図②



平成 10 年 9 月 (株) 三五館出版社発行「大石内蔵助の生涯」著者中島康夫が示した図。

史料図①を元に考えられた不完全な図。平成 10 年の時点では、小生も浅野内匠頭が障子側に座っていた事に気付かず、平成 12 年頃、畠山晴行氏に諭され「本座」の位置を変えた。現在は史料図④が正しいと信じている。

どんな事件にせよ、最初事件の事実を知らされると瞬間的に「手を出した方が悪く思われる」のである。が、日が経つにつれ、事件の詳細が知られてくると、事件を知った関係者や周りの人間も「事件」への見方が変わってくる。

「松之廊下事件」もその通りで、

(一) この事件が公務上とはいえず、「私憤」であることが分かり、吉良の傷は公傷と認められず、その治療費は以後、吉良自身の負担となっていた事実がある。

(二) 更に、浅野の切腹に対し、お構いなしの吉良は、三月二十六日には御役御免を願い出て了承されている。

(三) 更に、七月十二日には、毎日江戸城へ登城するのは心苦しくなったのか、月に一度程度に減日を願っている。

(四) 更に、八月十九日、吉良は屋敷を場末の本所へ移される指令が出される。

(五) 更に、同十二月十一日には、吉良は隠居を許され孫に家督を移す。

以上のように、現代でも同様の現象が見られるように、マスコミが人を沈めていくようなことが、吉良の身の上にも起こっていたのである。

普段、余りにも横暴であったがため、息子の上杉家以外は、親戚であつても関わりを避けていたのである。

以上、羅列した「吉良離れ」は、討入り開始から見るととれる。

○ 討入りは、かなり早くから周囲や親戚にも分かっていたが、どの家からも二時間の間応援は来ず。

○ 義士の引揚げは、三時間の時間を要したが、その間も、誰も引き止める者はいなかった。

○ 吉良邸の近くに「本所奉行所」があつたにも拘わらず動かさず。

さて、本題の「梶川氏日記」の内容を理解している学者がこの日本におられるだろうか。

○ 平成二十六年NHKより放映された、ザ・プレミアム「よみがえる江戸城」の番組中二十五分間「松之廊下の検証」が東京大学史料編纂所教授の指導のもとに行われ、放映されたが、これほど「ひどい」番組は過去に例を見ず、二十五分間の検証の間、何一つ真実は見出せなかった。このことにより、東大の教授も「梶川氏日記」を理解していないことが判明した。

○ 平成二十一年、江戸東京博物館内で「松之廊下事件」に関わる学芸員の講演があつたが、この方も「よくわからずのまま」の解

説であつた。失格。

○ 平成十年、原書房の「図解・江戸城をよむ」も、解読まで届かず。

○ 平成十三年、柏書房の「古文書で読み解く忠臣蔵」も解明届かず。

○ 平成二十五年、星雲社の「仮説・刃傷松の廊下事件」も解明不完全。

○ 平成二十七年、双里出版の「永遠の忠臣蔵」も解明不完全。

結局、どなたも努力はしているのだけれど、「梶川氏日記」の完全把握まで到らず、途中で躓いていることがわかる。

そこで、小生なら梶川語録を「こう考える」を少々述べてみたいと思う。

「御台様」 綱吉の正室鷹司信子のこと。

「熨斗つつみ」 勅使へのお帰りの際に渡すお土産の目録。

「殿上の間」 玄関の奥にある勅使の第一回目の休息部屋。

「大広間」 玄関横の三段かまちの部屋ではなく、松之廊下に接した

「下之間」のこと。勅使方はこの事件の時、既に、この「下之間」に入っていた。

「御障子際」 「下之間」に入っていた勅使方は、綱吉の対面の用意が出来れば「下之間」より出て白書院に移るので、それを迎えるため、松之廊下で饗応役、高家衆は縁側に面した障子際に一列に並んでいた。

「本座」 御障子際に並んでいた先頭の位置が内匠頭（責任者）の正面の位置。

「一言二言」 この内容が「赤穂義人録」巻上、三月十四日の項に示されている。

「吉良殿の後」 一般には、単純に後より切り付けたと解釈され、初太刀は背中を切ったことになっているが、この解釈は間違っている。

「太刀音は強く」 音が強く聞こえたということは、初太刀が烏帽子に当たった事を示す。実際、吉良は額を切られたことは、万人が認めているところである。後から切り付けたのであれば、吉良の後頭部に傷がなければならなくなる。

「切付け」 初太刀を示す。付けは刃が相手に触れたことを示す。

「又切付け」 二太刀目を示す。これも相手に刃が触れたことを示す。

「又二太刀ほど切られ」 切られは刀を振り回していることは認められる

が、刃が吉良の体に触れていないことを示す。吉良の傷は、額と背の二ヶ所であることは周知。

「吉良殿倒れ」二太刀目の衝撃で、既に吉良は前のめりに倒れかけていた。従って、浅野の三太刀目、四太刀目は空を切った。梶川氏日記の「うつ向」と金瘡部の「横うつむき」は同じことを示している。

「切付後の大広間」この表現は、玄関の横にある図面上の大広間のこと。

以上で注意しなければならないことは、江戸期の表現の仕方が、部屋が大きければ「大広間」。廊下が広ければ「大廊下」、川が大きければ「大川」と示すように、現代からすれば、やや曖昧な表現が全ての図面や書類から感じとれることである。

右に述べてきた梶川語録と史料図④と付き合わせていただければ、梶川氏日記の難解語も解けていくと思う。

元禄事件は、正味二年（元禄十四年二月四日より元禄十六年二月四日）の事件ではあったが、義士たちが切腹した元禄十六年二月四日、「吉良家断罪」（改易）の申し渡で、大石らが求めていた「喧嘩両成敗」が実ったのである。一年十ヶ月で綱吉も己の誤審「松之廊下事件」に気がついたのである。

大石ら四十七士は、身を挺して「再審請求」を求めたのだ。もっと俗っぽくいえば、一年十ヶ月（元禄十四年三月十四日より元禄十五年十二月十四日）掛けて、やるべきことをした上で殉死して逝ったともいえる。人々は、そこに「義」を感じ三百年間、泉岳寺の彼らの墓前に線香を手向けてきたのである。

だから、この、神が日本人に与えた「戒めの事件」を我々は正確に把握していかなければならない。

本論に異論のある方は、申し出を待っている。

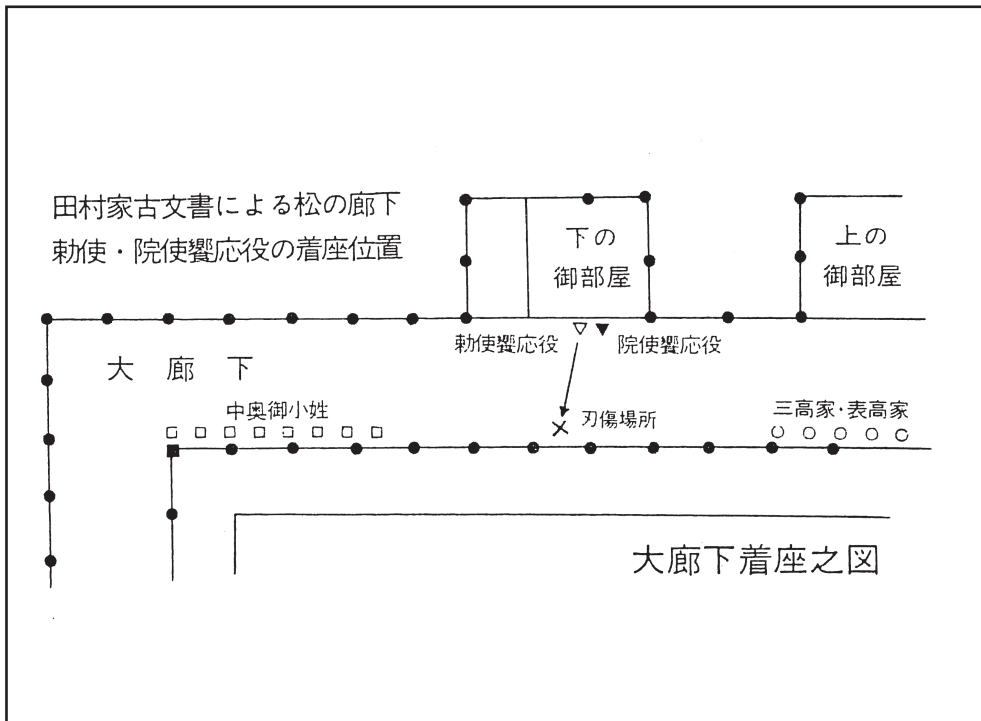
赤穂義士の子孫を名乗る方々へ告ぐ！

貴方方並びに貴家が義士の子孫家であるか確認したい方は、どうぞ、中央義士会をお訪ね下さい。

史学的に認められない場合、御子孫とは認められませんのでご了承下さい。当会では、**子孫認定証**を発行しております。ご相談下さい。

中央義士会 中島

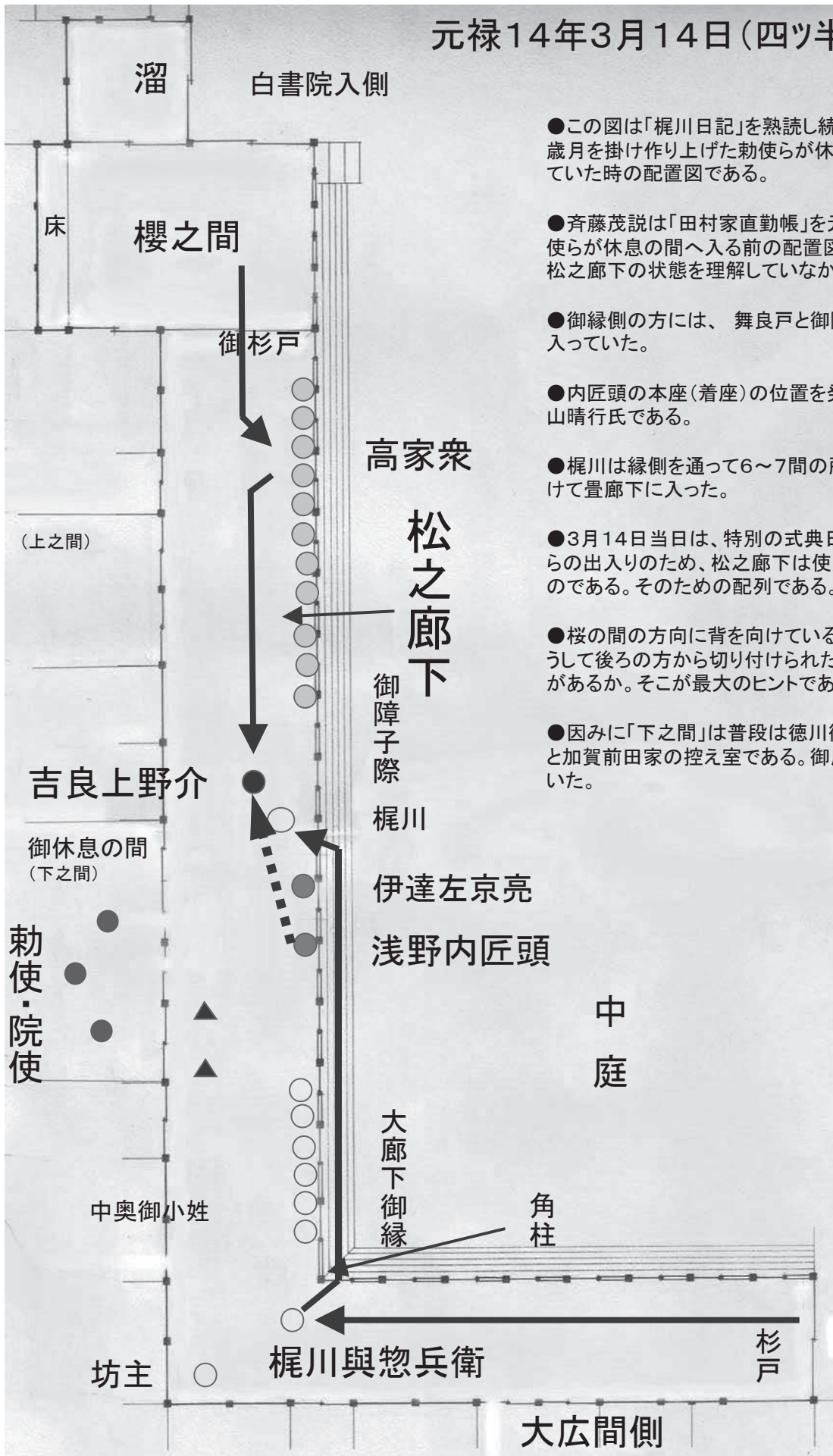
史料図③



昭和 55 年 3 月 NHK 発行「歴史への招待」刃傷松之廊下に掲載された、中央義士会理事齊藤茂氏が示した図。

この図は、史料図①をそのまま写した図。他社の出版物に初めて掲載された図である。

元禄14年3月14日(四ツ半刻)



- この図は「梶川日記」を熟読し続けて、20年の歳月を掛け作り上げた勅使らが休息の間に入っていた時の配置図である。
- 齊藤茂説は「田村家直勤帳」を元にした勅使らが休息の間へ入る前の配置図▲印であり、松之廊下の状態を理解していなかった。
- 御縁側の方には、舞良戸と御障子が交互に入っていた。
- 内匠頭の本座(着座)の位置を発見したのは畠山晴行氏である。
- 梶川は縁側を通過して6~7間の所の障子を開けて畳廊下に入った。
- 3月14日当日は、特別の式典日である。勅使らの出入りのため、松之廊下は使用されているのである。そのための配列である。
- 桜の間の方向に背を向けている上野介が、どうして後ろの方から切り付けられたか、考えたことがあるか。そこが最大のヒントである。
- 因みに「下之間」は普段は徳川御三家の子息と加賀前田家の控え室である。御広間とも言うていた。

史料図④

第十九回忠臣蔵愛好会 引揚げコースを歩く

中央義士会会員 坂藤美子

平成二十九年一月二十九日に毎年行っている、吉良邸から泉岳寺までの赤穂義士引揚げコース十二kmを歩く会が行われました。

何度かこの引揚げのコースは歩いていましたが、今回は私にとって特別なものになりました。初めて参加者の方をガイドして歩くことになったからです。

今回は多くの方に参加いただき、なんと四十七名、不思議な縁を感じながらのスタートとなりました。吉良邸で中島代表のお話の後、四班に分かれ、スタートとなりました。前原米店、回向院、両国橋、伝えたいこと、話したいことはノートにまとめ、準備してきたつもりですが、そちらに気を取られていると道を間違えそうになってしまい、ひそかに慌ててしまう場面もありました。私の班の方たちは、『忠臣蔵』が本当にお好きで、また色々なことをよくご存じでした。道の途中、通行の妨げにならないところを選んで、説明をさせていただくポイントを作るようにしましたが、都度、質問が出てきて、更に話が弾む画面もありました。休憩を取っている時、スケッチブックにイラスト付きでメモを取っている方がおられて、私のほうも刺激をもらいました。

隅田川テラス、越前堀公園、聖路加ガーデンと進んでいきますが、何度も歩いていけると、街の様子も少し変わってたり、目印の建物がなくなっていたりします。しかし、『忠臣蔵』の舞台となった場所がテレビ局や病院、果ては歌舞伎座など有名なものになっていることは、私が最初に歩い

た時と同じように、今回の参加者の方たちも驚かれています。

永代橋から眺めるスカイツリー、札ノ辻で見る東京タワー、私のおすすすめの二大絶景ポイントも好天に恵まれ、よい眺めでした。

御田八幡を過ぎるともう泉岳寺です。泉岳寺では参加の方全員集合の後、皆さん思い思いに義士墓に焼香され、大石内蔵助らが切腹した旧細川邸へ移動しました。この地に入れることを楽しみにされていた参加者の方も多かったと思います。締めくくりに中島代表からたくさんの資料とともに熱い解説があり、満足されたのではないでしょう

うか。皆さん、笑顔で帰って行かれました。私ももっと勉強しなければ、と思いつつ、今回の出合いが小さなきっかけになって次の出合いにつながるいいなと思えました。

なお、これもまた恒例ですが、一月二十二日に、大石内蔵助らの切腹地を清掃しました。清掃はボランティアですが、皆様も一度参加下さい。



切腹の地 清掃の皆さん
左から、金子さん、勝田さん、中島代表
筆者、荻原さん



85歳の方も完歩しました
泉岳寺の前で 1班



出発前 吉良邸跡の前で



完歩しました 泉岳寺の前で 3班



完歩しました 泉岳寺の前で 2班

平成二十八年十二月十四日(水)は、赤穂義士討入り満三十四年目に当たり、泉岳寺において、赤穂義士追憶の会が催されました。明治四十三年に福本日南翁が開始して以来、今回で百六十年目の開催となります。

当日は水曜日でしたが、百十名を超える方々の参加があり、会場は大変賑わいました。

午後二時から泉岳寺本堂において、赤穂義士の法要が行われ、その後本堂横の庫裏において、例会が行われました。まずは、来賓の挨拶に続き、今年は当会会員でもある、キングレコード専属の大金吾氏に出演いただき、忠臣蔵の歌に参加者一同多いに盛り上がりました。つづいて、忠臣蔵検定試験合格者の認定証授与、御子孫の紹介がありました。また、お楽しみ抽選会で豪華賞品などが

赤穂義士討入り満三十四年祭報告



完歩しました 泉岳寺の前で 4班



本堂で法要

また、十二月十日、十一日には、両国松坂公園付近において、両国町内会による元禄市が開催され、中央義士会も参加し忠臣蔵関係の図書販売を行いました。今年も、元禄市に出店いたしますので、皆様のお越しをお待ちしております。(文 萩原)

当たり、今年も盛会裡に幕を閉じました。今年も昨年に続き、例年以上の参加者となったため、いつもの二倍のスペースを利用して戴き、泉岳寺様に御礼を申し上げると共に、ご不便をおかけした皆様にお詫び申し上げます。



夜の泉岳寺 中央義士会の忠臣蔵本販売所
屋間は人で埋まります



忠臣蔵歌手大金吾氏の熱唱



本堂での法要

浅野内匠頭三二七回忌報告

平成二十九年三月十二日(日)に、浅野内匠頭三二七回忌の法要を、泉岳寺において催しました。例年三月十四日が平日の場合、直前の日曜日に開催してきましたので、今年は十二日になりました。三十名近い方々の参加がありました。

午後二時から泉岳寺本堂において、浅野内匠頭の法要が行われ、その後本堂横の庫裏において、例会が行われました。まずは、来賓の挨拶のあと、中島代表の「なお詳しく松之廊下の刃傷事件の解説」と題した講演で、松之廊下事件について史料に基づいた話があった後、懇親会に入りました。

懇親会の最初は、御子孫の紹介があり、次にお楽しみ抽選会で豪華賞品などが当たり、今年も盛会裡に幕を閉じました。(文 荻原)



講演の様子

第二十回忠臣蔵愛好会の報告

二十回目の忠臣蔵愛好会が、平成二十九年四月二十三日(日)に行われました。快晴で史蹟巡りには最適の天候の中、三十名の方が参加されました。

今回は、南部坂雪の別れと題して、中島代表の案内の元、赤坂・六本木の忠臣蔵関係史蹟を巡る旅を行いました。

集合は地下鉄六本木一丁目駅の三番出口に十三時。それから南部坂に向かいました。この坂はかつて南部藩の屋敷があったところで、そこからこの名が付いています。元禄十五年の江戸絵図には、南部坂の名を見ることができません。

南部坂を登った所に現在は氷川神社があります。樹齢四百年を超える銀杏の木もあり、往事を偲ばせています。この氷川神社は元禄時代には、浅野

内匠頭の奥方阿久利姫の実家、三次浅野家があったところで、松之廊下事件後に、瑠泉院となった阿久利姫が生活していた場所です。ここから、講談や映画などで忠臣蔵の名場面、南部坂雪の別れが出来きました。講談では、元禄十五年十二月十四日、大石内蔵助が瑠泉院を訪れ、密かに連判状を渡して討入りを伝える感動的な場面となりますが、実際は、討入直前には内蔵助は訪れてはいません。その前の年、元禄十四年の十一月十四日ころに訪れ、そこで討入りを告げています。瑠泉院は寒がりの内蔵助のために頭巾を贈り、その女性の頭巾を討入り後、預けられた細川邸において、かぶって寝ていたことが分かっています。

氷川神社ではお日柄も良かったためか、結婚式が行われており、白無垢の花嫁が緑の中に映えていました。

氷川神社から直ぐ近くの勝海舟の屋敷跡に立ち寄りました。そこからテレビでお馴染みの長谷川平蔵の生誕地に寄り、赤穂浅野家赤坂下屋敷跡へと向かいました。氷川神社からここへの道は、大変な坂が続く、皆さん下りでよかった、登りではとても無理だ、との声が聞こえてきました。中島代表は、それを意識したルートにしたとのことです。

下屋敷跡は現在、港区の介護施設などになっていますが、その前は氷川小学校でした。実は、今回参加された仙石伯耆守の御子孫の大内さんは、この小学校の出身とのことで、その当時のことをご説明していただきました。この赤坂下屋敷は、元禄十年に土地が五分の一に減らされ、その替え地として、本所に土地を賜っています。現在の両国高校の場所です。また、明治に入って、勝海舟の屋敷にもなりました。そのためか、勝海舟と坂本龍馬の銅像が建てられました。参加者からは、勝海舟がこの屋敷に移ったのは明治五年なのに、坂本龍馬像があつて、浅野内匠頭の銅像が無いのはおかしいのではないかと、との意見が相次ぎ

ました。
 予定では、現在TBSがある、広島浅野家中屋敷跡も尋ねることになっていましたが、時間も迫り赤穂浅野家下屋敷跡地で解散となりました。
 (文 萩原)



全員そろって 氷川神社大銀杏の前



氷川神社



南部坂

第5回忠臣蔵通3級検定試験問題

[申込方法]

・ 解答用紙の請求

検定試験の受験をご希望の方は、住所、氏名、電話番号、FAX番号並びに、第5回3級検定試験申込と記入した用紙を、下記宛てFAXまたは郵送でお送り下さい。FAXをお持ちの方は、できるだけFAXでお願い致します。また、メールでも受け付けております。折り返し解答用紙をお送り致します。

宛先 〒135-0047 東京都江東区富岡1-17-1-403

NPO法人 忠臣蔵倶楽部

TEL/FAX 03-3630-1927

メール office@chuushingura.jp

・ 受験料と振込先

3級の受験料は1000円です。振り込みで受験申込となります。

郵便局の青色の払込取扱票で下記へお振り込みください。

NPO法人 忠臣蔵倶楽部 00190-0-346038

払込取扱票の通信欄に「第5回3級試験申し込み」と記入下さい。

払込料金をご負担をお願いしております。

[解答の送付]

解答はFAXで下記へお送りください。郵送の場合は、下記の中央義士会事務局へお送りください。メールでは受け付けておりませんのでご注意下さい。

FAX 048-973-3790

郵送宛先 〒343-0032 埼玉県越谷市袋山 58-12 中央義士会事務局

- ・ 提出締め切りは平成29年10月末です。合否は11月になってからお知らせ致します。

[注意事項]

- ・ 合格点は80点です。24問以上正解で合格となります。
- ・ ご自宅で資料を調べて解答していただいて結構です。
- ・ 試験問題を調べるために、お電話等で各施設へ直接問い合わせることはおやめ下さい。
- ・ 同じく、会員、受験者同士でも試験のための連絡はおやめ下さい。特に申し上げるのは、連絡しあっている方は、同じ答えで間違っているのですぐにわかります。
- ・ 問題をよく読んで、一言一言理解した上で、解答して下さい。問題を読み間違えないようお願い致します。ひっかけ問題も出題されています。
- ・ 中央義士会の過去の出版物でも誤記はありますので充分確認の上、解答して下さい。
- ・ 受験料は締め切りの1ヶ月前までにお納め下さい。
- ・ 最終提出日は、平成29年10月末日です。

緊急報告！

昨年、平成28年12月10日（土）テレビ朝日放送の中央義士会制作協力作品「古館トーキングヒストリー-忠臣蔵」が第43回放送文化基金賞で優秀賞を受賞しました。視聴ありがとうございました。

第25問	吉良上野介がカステラを食べていたという史料が残っていますが、その史料はどこが保存しているでしょう。 ① 永青文庫 ② 東京国立博物館 ③ とら屋 ④ 吉良町（西尾市）
第26問	討入られた吉良方では、長屋の横板に穴を開けて逃げた方がいます。何名逃げたでしょう。 ① 1名 ② 2名 ③ 3名 ④ 4名
第27問	討入りの結果を一番に、瑤泉院に知らせたのはだれでしょう。 ① 寺坂吉右衛門 ② 大石三平 ③ 甚三郎 ④ 玄達
第28問	矢野伊助の上司はどなたでしょう。 ① 大石内蔵助 ② 吉田忠左衛門 ③ 原惣右衛門 ④ 小野寺十内
第29問	平成時代に入って、寺坂吉右衛門を「逃亡者」と決めつけ「論文」を発表した学者がおります。このような学者をあなたはどのように思いますか。 ① この学者は証拠を挙げているので正しい ② 学者の手前、意地を張り通した ③ こんな学者に仕事をたのむ方がおかしい ④ この学者そのものが勉強不足である その他の意見があればお書き下さい。 []
第30問	架空のはなしですが、赤穂四十六士が切腹後に「義士会」ができたとしたら、あなたは当時のどなたを会長に選びますか。例えば「堀内伝右衛門」など。 名前 []

中央義士会
理事 遠藤信夫
静岡県富士市在住

皆様のお心遣いに感謝
すべく熊本城の復旧・
復元を目指して「復興
城主 中央義士会」と
して登録させていただきました

細川綱利公もおよろこ
びのことと存じます。

中央義士会 山鹿支部

昨年の熊本地震に際しましては
多大なご心配ありがとうございました
皆様のおこころざしは被災されたご子孫
や関係の方々にお届けいたしました
又 八月二十六日には堀口伝右衛門さん
の二百九十回忌法要を執り行いました

中央義士会 山鹿支部 支部長
平成堀内組 頭取
宮川政士

NPO 法人忠臣蔵倶楽部

役員 **勝田芳造**



家紋「蛇の目」

東京都足立区在住

NPO 法人忠臣蔵倶楽部

役員 **金子堅一**

東京都荒川区在住

NPO 法人忠臣蔵倶楽部

理事 **三輪三郎**

川崎市麻生区在住

堀部安兵衛武庸を顕彰する「武庸会」

会長 **嶋谷次郎八**

越後 新発田

健康です、テニスをします！

高松ローンテニスクラブ

オーナー 上原 益雄
中央義士会 評議員
東京都練馬区高松

NPO 法人忠臣蔵倶楽部

代表代行 **荻原 栄**

NPO 法人のホームページは <http://www.chushingurane.net/> です

中央義士会に六十年間在籍して居ります

大内満利子

仙石伯耆守子孫

開業支援 レセプト代行 訪問ナース 訪問リハビリ

(株)メディカル オフィス ベラ

代表取締役 **武類俊哉**

東京都北区在住

編集後記

中央義士会は、百年以上「元禄事件」の研究を続けてきた。しかし、よくもこう嘸気にも出さず恥をさらして脱盟(退会)していくのか。何を学んでいるのか。「いじめ」は「上野介」から学べ、「義」は「内蔵助」から学べ、「忍耐」は「内匠頭」から学べの教えがあるのに、平然と退会していく。なかには「義士の子孫」などと名乗りながらも脱盟していく。「子孫の会」などと名乗ってはいるが「何人」本物がいるか。九十八%は「疑わしい方々」である。中央義士会は平井教育長の時代から「間違いない子孫」ばかりを赤穂市の十二月十四日の「義士祭」に派遣してきた。少なくとも脱盟者に限り論文の一つも書けない輩ばかりである。NPO 法人も同意見である。
いずれも関東甲信越の話である。

編集者 中島康夫(企画・編集・検証)

荻原 栄(編集) 富岡 克(校正)

中西 勉(校正) 勝田芳造(校正)

三輪三郎(校正)

(株)正大印刷社 (印刷)